B. 研究方法

1都2府6県（東京都，大阪府，京都府，奈良県，兵庫県，山口県，福岡県，宮崎県，鹿児島県）の病院勤務助産師 231 名を対象に，自記式質問紙調査を行い，171 名より調査票を回収した（回収率 74.0%）．調査項目は，ア）基本的属性，イ）飛び込み出産産婦と関わった経験，ウ）飛び込み出産産婦に対する印象（イメージ），エ）飛び込み出産産婦に対応するための病棟マニュアル，オ）飛び込み出産産婦に対する産後のケア，とした．

倫理面への配慮：調査は無記名とし，研究目的以外の使用はしないことを文書にて説明し，同意の得られた者にのみ調査を実施した．

C. 研究結果

ア）基本的属性

分析対象者の平均年齢は 34.4 歳（標準偏差 9.2），助産師歴の平均値は 9.5 年（標準偏差 8.4）であった．勤務先の 1 ヶ月の分娩県巣の平均値は 53.9 件（標準偏差 21.8）であった．分析対象のうち，子どもがいる者は 69 名（40.4%）であった．

イ）飛び込み出産産婦と関わった経験

分析対象のうち，これまでに飛び込み出産産婦と関わった経験がある者は 112 名（65.5%）であった．そのうち，分娩期のみ関わった者は 21 名，産褥期のみ関わった者は 13 名，分娩期・産褥期の両時期とも関わった者は 78 名であった．

分娩期に関わった経験を有する 98 名に対し，最近関わった飛び込み出産産婦の様子について「あてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」の 3 つの選択肢を用いて質問した結果，1)「児が産まれた瞬間，児を気にかける様子があった」あてはまる 44.9%，どちらともいえない 30.6%，あてはまらない 24.5% であった．2)「よく児へ声をかけていた」あてはまる 29.6%，どちらともいえない 38.8%，あてはまらない 31.6%であった．3)「児のために頑張りたいなどの発言があった」あてはまる 22.4%，どちらともいえない 32.7%，あてはまらない 44.9%であった．4)「いいお産だったとの発言があった」あてはまる 8.2%，どちらともいえない 31.6%，あてはまらない 60.2%であった．5)「主体的にお産に取り組んでいた」あてはまる 9.2%，どちらともいえない 41.8%，あてはまらない 49.0%であった．「あてはまる」が最も多くみられた項目は 1)「児が産まれた瞬間，児を気にかける様子が見られた」であった．「あてはまる」が最も少なかった項目は 4)「いいお産さんだったとの発言があった」であった．

産褥期に関わった経験を有する 91 名に対し，最近関わった飛び込み出産産婦の様子について「あてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」の 3 つの選択肢を用いて質問した結果，1)「よく児へ声をかけていた」あてはまる 40.7%，どちらともいえない 46.2%，あてはまらない 13.2%であった．2)「授乳行動を取っていた」あてはまる 73.6%，どちらともいえない 15.4%，あてはまらない 11.0%であった．3)「児をだっこするなどあやしていた」あてはまる 69.2%，どちらともいえない 20.9%，あてはまらない 9.9%であった．4)「児に優しく接していた」あてはまる 56.0%，どちらともいえない 31.9%，あてはまらない 12.1%であった．5)「おむつ交換など清潔を保つようにしていた」あてはまる 59.3%，どちらともいえない 26.4%，あてはまらない 14.3%であった．「あてはまる」が最も多くみられた項目は 2)「授乳行動を取っていた」で

あった.「あてはまる」が最も少なかった項目は 1)「よく児へ声をかけていた」であった.

ウ) 飛び込み出産産婦に対する印象（イメージ）

飛び込み出産産婦に対するイメージとして，多い順に並べると「情報不足で母児共に危険」83.5%，「危険性理解してない」82.3%，「ケアの対象である」81.1%，「妊婦健診の必要性を理解していない」80.5%，「家族支援必要」76.4%，「未払い、支払困難」73.5%，「メンタル面のケア必要」59.4%，「モラルが低い」49.4%，「早期接触必要」45.2%，「助産師の関わりで絆深める」42.9%，「訴訟対象の可能性」19.4%，「その他」7.1%の順であった.

エ) 飛び込み出産産婦に対応するための病棟マニュアル

飛び込み出産産婦に対応するための病棟マニュアルの有無について，「ある」と回答した者は 39 名（22.8%）であった. そのマニュアルの内容としては「感染症対策」94.9%（37/39)，「経済的支援」25.6%（10/39)，「メンタルケア」17.9%（7/39)，「搬送システム」61.5%（24/39)，「母子の絆」17.9%（7/39)，「その他」5.1%（2/39）であった.

オ) 飛び込み出産産婦に対する産後のケア

飛び込み出産産婦に対して関わる際に特に意識する項目を選択肢の中から 3 つ選ぶ設問の結果を回答順に並べると，「寄り添い・積極的傾聴」63.2%（105/171)，「児の誕生の祝福」59.0%（98/171)，「出産に対する労い」51.8%（86/171)，「質問・要求への対応」34.3%（57/171)，「実施内容の説明」31.9%（53/171)，「家族への気遣い」29.5%（49/171)，「児の丁寧な扱い」24.6%（41/171）の順であった.

同様に，飛び込み出産産婦に対して必要な助産師としての専門性を生かしたケアに関する項目を選択肢の中から 3 つ選ぶ設問の結果を回答順に並べると，「育児支援」57.5%（95/171)，「母乳栄養・授乳支援」47.2%（78/171)，「家族計画指導」44.8%（74/171)，「メンタルケア」40.6%（67/171)，「社会資源の紹介」38.7%（64/171)，「産後の母体回復へのケア」26.0%（43/171)，「産後の家庭訪問」23.0%（38/171)，「産後の受診勧奨」14.5%（24/171)，「電話相談」7.27%（12/171）の順であった.

D. 考察

今回の調査の結果，半数以上の者が飛び込み出産産婦に関わった経験を有していた. 今回の調査では，勤務病院毎の集計を行っていないため，施設毎での割合は明らかではないが，一度の妊婦健診を受診せずに出産に至るケースはそれほど希ではないことが明らかになった. 病棟としての対応マニュアルがある者は全体の 22.8%で有り，飛び込み出産産婦を受け入れる施設であってもマニュアルを整備していない施設もみられた. マニュアルの内容としては，感染症対策，搬送システムといった項目が多く含まれた一方で，ケアに関わる内容は充実しているとはいえなかった. 実際に飛び込み出産産婦を受け持った経験を有する者の回答結果から，飛び込み出産産婦における出産に対する満足感や育児に対する積極性はそれほど高くないことが伺える. 飛び込み出産産婦に関わる際のケアのポイントとして「寄り添い，傾聴」「児の誕生の祝福，「出産に対する労い」等の出産に対する肯定的な姿勢を挙げる者が多かったこと，助産師としての専門性を活かしたケアとして，「育児支援」「母乳栄養・授乳指導」「家族計画指導」「メンタルケア」を挙げる者

が多かったことから，出産に対する肯定的な意味づけと産後からの継続的なケアが重要であると考える助産師が多いことが本研究の結果明らかとなった．今回の調査では，飛び込み出産に至った背景等に関する産婦側の因子については調査していないため，個別的な配慮，サポートの必要性について助産師がどのように考えているかは明らかではないが，病院勤務助産師は，飛び込み出産産婦に対して，好意的な印象を抱いていないこと，出産に対する肯定的な意味づけが重要であること，産後の継続的なケアの必要性を認識していること，が明らかとなった．

E. 結論

本研究の結果，次のことが明らかとなった．1)「飛び込み出産産婦」と関わった経験がある者は65.5%（112/117）であった，2)「飛び込み出産産婦」に対するイメージとして“情報不足で母子共に危険”，“危険性を理解していない”，“ケアの対象である”が多くみられた，3)勤務する病棟に飛び込み出産に対応するマニュアルがあると回答した者は22.8%（39/171）であった．

F. 研究発表

学会発表

出原麻悠，小澤彩香，勝間洋江，小林茜，鈴木幸，野間裕子，倉本孝子，樋口善之，松浦賢長「飛び込み出産産婦へのケアに対する助産師の認識」第47回大阪母性衛生学会（大阪），2009年1月．

資料：調査票

飛び込み出産に関するアンケート

A.　あなたご自身について、以下の設問にお答えください。

A1. あなたは、おいくつですか。

（　　）歳

A2. あなたは、お子様がいらっしゃいますか。いらっしゃる場合は人数をお聞かせください。

1. はい（　　）人　　2. いいえ

A3. あなたの助産師としての経験年数をお聞かせください。

（　　）年

A4. あなたが所属する施設の１ヶ月の分娩件数は平均してどの程度ですか。

約（　　）件

B.　飛び込み出産の妊産褥婦の方に対するあなたの考えをお聞かせください。

B1.　今まで飛び込み出産の妊産褥婦の方に関わったことがありますか。

1. はい　→B2　　2. いいえ　→C1へ

B2.　「B1」で「はい」と答えた方にお聞きします。
関わったことがある飛び込み出産の妊産褥婦の方の人数について、あてはまるものを選んでください。

1. 1人　　2. 2~5人　　3. 6~9人　　4. 10人以上

B3.　関わったことがある飛び込み出産の妊産褥婦の方はどの時期の方ですか。あてはまるものを選んでください。

1. 分娩期→B4へ　　2. 産褥期→B5へ　　3. 両時期→B4、B5へ

B4. もっとも最近関わった事例でお答えください。関わったことがある飛び込み出産の産婦の方の様子について、あてはまる場合については「1」、どちらともいえない場合については「2」、あてはまらない場合については「3」に○をつけてください。

	あてはまる	どちらともいえない	あてはまらない
1）児が生まれた瞬間、児を気にかける様子がみられた	1	2	3
2）よく児へ声をかけていた	1	2	3
3）児のために頑張りたいなどの発言があった	1	2	3
4）いいお産だったとの発言があった	1	2	3
5）主体的にお産に取り組んでいた	1	2	3

B5. もっとも最近関わった事例でお答えください。関わったことがある飛び込み出産の褥婦の方の様子について、あてはまる場合については「1」、どちらともいえない場合については「2」、あてはまらない場合については「3」に○をつけてください。

	あてはまる	どちらともいえない	あてはまらない
1）よく児へ声をかけていた	1	2	3
2）授乳行動をとっていた	1	2	3
3）児を抱っこするなどあやしていた	1	2	3
4）児に優しく接していた	1	2	3
5）おむつ交換など清潔を保つようにしていた	1	2	3

C. 全員の方にお聞きします。あなたの考えとして、以下の設問にお答えください。

C1. あなたは飛び込み出産の妊産褥婦の方に、どのような印象を持っていますか。

次のうち、あなたの考えに近いものをすべて選んで下さい。

1. 飛び込み出産であろうとなかろうと、助産ケアの対象であることには変わりない
2. 児との早期接触が必要な対象である
3. メンタル面のケアが必要な対象である
4. パートナーを含めた家族支援が必要である
5. 助産師のかかわりで、母子間・家族間の絆を深めることが出来る
6. 妊娠や出産の危険性を理解していない
7. 未払い・支払い困難である
8. 情報が十分にないので医療者、母児共に危険である
9. 訴訟の対象になる可能性がある
10. モラルが低い
11. 妊婦健診の必要性を理解していない
12. その他（　　）

D.　飛び込み出産に対応するマニュアルについてお聞かせください。

D1. 飛び込み出産に対しての、病棟でのマニュアルはありますか。

1. はい→D2へ　　2. いいえ→E1へ

D2. 「D1」で「はい」と答えた方にお聞きします。

その内容はどのような事項を扱ったものですか。あてはまるものをすべて選んでください。

1. 感染症対策について
2. 経済的支援について
3. メンタルケアについて
4. 搬送システムについて
5. 母児の絆を深めるケアについて
6. その他（　　）

E.　飛び込み出産の妊産褥婦の方に対する産後のケアについて、考えをお聞かせください。

E1. 飛び込み出産の妊産褥婦の方に対して、心にとめて関わりたいと思うことはなんですか。以下の1～7の選択肢の中から特に重要と考えるものを3つお選びください。

1. 寄り添い、積極的傾聴
2. 実施内容の説明
3. 家族への気遣い
4. 質問・要求への対応
5. 出産に対するねぎらい
6. 児の誕生の祝福
7. 児の丁寧な扱い

E2. 飛び込み出産の妊産褥婦の方に対して、専門職である助産師だからこそできるケアは何だと考えますか。
以下の1～9の選択肢の中から特に重要と考えるものを3つお選びください。

1. 産後の母体回復へのケア
2. 育児支援
3. 母乳栄養・授乳支援
4. 家族計画指導
5. メンタルケア
6. 産後の受診勧奨
7. 電話相談
8. 産後の家庭訪問
9. 社会資源の紹介

女子高校生における月経，母子・友人関係，自己肯定感，身体像および逸脱行動に関する研究

樋口　善之　（福岡県立大学看護学部地域看護学講座）
西藤　茜　（愛仁会看護助産専門学校）
生田　貴恵　（愛仁会看護助産専門学校）
河内　茉利　（愛仁会看護助産専門学校）
三谷　由佳　（愛仁会看護助産専門学校）
山住　千尋　（愛仁会看護助産専門学校）
増本　綾子　（愛仁会看護助産専門学校）
野間　裕子　（愛仁会看護助産専門学校）
小川　知　（愛仁会看護助産専門学校）
倉本　孝子　（愛仁会看護助産専門学校）
黒木　仁美　（秋田県立仁賀保高等学校）
大井　美恵子（秋田県立西目高等学校）
渡辺　多恵子（筑波大学）
仁木　雪子　（弘前学院大学）
丸岡　里香　（北翔大学）
松浦　賢長　（福岡県立大学看護学部地域看護学講座）
山縣　然太朗（山梨大学医学部社会医学講座）

本研究は，高校 1 年から高校 3 年までの女子を対象に，月経，対人関係，自己肯定感および逸脱行動に関する調査を行った．1 府 5 県の高等学校 9 校に調査依頼し，1049 名に調査票を配布し，966 名から調査票を回収した．調査項目は，月経を迎えた時期，悩みの相談相手，自己肯定感，不健康やせ・自傷行為等の逸脱行動であった．調査の結果，以下のことが明らかとなった．1）初経を迎えた時期としては小学校 6 年が最も多かった．また初経時に女性性を意識した割合は 64.1%（619/966）であった．2）悩みの相談相手として「友人」71.7%が最も多くみられた．「相談していない」と回答した者は 8.9%であった．3）自己肯定感尺度の 4 つの下位領域得点は，自律 20.3，自信 11.4，信頼 16.9，過去受容 11.3 であった．4）5kg 以上の急激な体重減少を経験した者は 18.0%（160/888），自傷行為の経験は 8.6%（77/888）であった．

A. 研究目的

本研究は，女子高校生における月経，母子・友人関係，自己肯定感，身体像および逸脱行動に関する調査を行い，女子高校生における心理社会的な諸問題に対応するための基礎資料を得ることを目的とした。

B. 研究方法

1府5県の高校1年から高校3年までの女子生徒1049名を対象に，自記式質問紙調査を行い，966 名より調査票を回収した（回収率92.1%）．調査項目は，ア）初経・月経，イ）母子・友人関係，ウ）身体像・自己肯定感，エ）逸脱行動とした．

倫理面への配慮：調査は無記名とし，研究目的以外の使用はしないことを文書にて説明し，同意の得られた者にのみ調査を実施した．

C. 研究結果

分析対象の学年の内訳は，1 年生 349 名（36.1%），2 年生 397 名（41.1%），3 年生 218 名（22.6%），無回答 2 名（0.2%）であった．

ア）初経・月経

初経を迎えた時期としては，「小学 6 年生」34.1%（329/966）がもっと多くみられた．次いで，「中学 1 年生」23.3%（225/966），「小学 5 年生」20.0%（193/966）の順であった．まだ迎えていない者は 2 名みられた．初経を迎えていない 2 名をのぞいた 964 名に対し，「初経を迎えたときに女性であることを意識しましたか」と質問したところ，はい 64.1%（619/964），いいえ 34.5%（333/964），無回答 1.2%（12/964）であった．「はい」と回答した 619 名に対し，「あなたは女性として生まれてよかったと思いますか」と質問したところ，はい 75.9%（470/619），いいえ 22.9%（142/619），無回答 1.1%（7/619）であった．また同様に，「月経がくることに慣れましたか」と質問したところ，はい 84.2%（521/619），いいえ 15.3%（95/619），無回答 0.5%（3/619）であった．「月経がくることに慣れた」者 521 名に対し，月経に慣れた時期を質問したところ，「1 年」37.6%（196/521）が最も多くみられた．次いで「1 年未満」35.7%（186/521），「2 年 19.2%（100/521）」の順であった．3 年以上という回答も 7.1%（37/521）みられた．

イ）母子・友人関係

「悩みがあるとき，誰に相談しますか」という質問（複数回答）に対して，母親 40.5%（391/966），母親以外の家族 12.3%（119/966），友人 71.7%（693/966），その他 8.2%（79/966），相談していない 8.9%（86/966）であった．次に「月経について話をする相手がいますか」という質問（複数回答）に対して，母親 61.1%（590/966），母親以外の家族 10.1%（98/966），友人 58.0%（560/966），その他 4.1%（40/966），相談していない 14.0%（135/966）であった．

「友人と問題が生じた場合に，自分で解決できる方ですか」という質問に対して，とてもそう思う 8.8%（85/966），ある程度そう思う 60.9%（588/966），あまりそう思わない 25.2%（243/966），全くそう思わない 3.4%（33/966），無回答 1.8%（17/966）であった．「友人との人間関係をうまく築けていけるほうですか」という質問に対して，とてもそう思う 16.1%（155/966），ある程度そう思う 68.6%（661/966），あまりそう思わない 11.9%（115/966），全くそう思わない 1.7%（16/966），無回答 1.8%（17/966）であった．

「あなたは自分の家族が好きですか」という質問に対して，はい 84.1%（812/966），いいえ 13.0%（126/966），無回答 2.9%（28/966）であった．「あなたは自分の母親に似ていると言われるとうれしく思いますか」という質問に対して，とてもそう思う 14.1%（136/966），ある程度そう思う 42.4%（410/966），あまりそう思わない 30.3%（293/966），全くそう思わない 9.2%（89/966），無回答 1.8%（17/966），非該当 2.2%（21/966）であった．「母親との

人間関係をうまく築けていけるほうですか」という質問に対して，とてもそう思う 41.1%（400/966），ある程度そう思う 45.2%（437/966），あまりそう思わない 6.7%（65/966），全くそう思わない 3.1%（30/966），無回答 1.3%（13/966），非該当 2.2%（21/966）であった．「母親と問題が生じたとき，自分で対応できるほうですか」という質問に対して，とてもそう思う 22.6%（218/966），ある程度そう思う 54.6%（527/966），あまりそう思わない 14.2%（137/966），全くそう思わない 5.0%（48/966），無回答 1.6%（15/966），非該当 2.2%（21/966）であった．

ウ）身体像・自己肯定感

「他の女性の体型に注目して，それに比べると自分の体型は好ましくないと感じたことはありますか」という質問に対して，よくある 53.2%（514/966），たまにある 35.3%（341/966），ほとんどない 5.5%（53/966），まったくない 2.8%（27/966），無回答 3.2%（31/966）であった．「体型について泣くほど気にやんだことはありますか」という質問に対して，よくある 8.1%（78/966），たまにある 21.2%（205/966），ほとんどない 36.6%（354/966），まったくない 30.7%（297/966），無回答 3.3%（32/966）であった．

自己肯定感尺度の 4 つの下位尺度の平均値は，自律領域 20.4（標準偏差 3.9），自信領域 11.4（標準偏差 2.6），信頼領域 16.9（標準偏差 3.8），過去受容領域 11.3（標準偏差 3.9）であった．自己肯定感尺度 20 項目におけるクロンバックのアルファ係数は 0.728 であった．各下位尺度得点間の相関係数は，自律－自信 0.511，自律－信頼 0.291，自律－過去受容 0.144，自信－信頼 0.149，自信－過去受容 0.082，信頼－過去受容-0.002 であった．

エ）逸脱行動

このカテゴリーに含まれる 3 項目については，調査依頼先の学校と協議し，実施しなかった学校があるため，調査対象者数は一定ではない．「あなたはこれまでに，急激に体重が減った（5kg 以上）ことがありますか」という質問に対して，はい 18.0%（160/888），いいえ 81.4%（723/888），無回答 0.6%（5/888）であった．「あなたはこれまでに虐待（言葉による暴力や精神的な暴力を含む）と思われるような対応を，親から受けたことがありますか」という質問に対し，まったくなかった 71.7%（482/672），ほとんどなかった 16.2%（109/672），時々あった 10.0%（67/672），日常的にあった 1.3%（9/672），無回答 0.7%（5/672）であった．「あなたはこれまでに，自傷行為（リストカットなど）をしたことがありますか」という質問に対して，考えたこともない 71.6%（636/888），しようと思ったことはある 18.7%（166/888），一度だけある 2.9%（26/888），何度もある 5.7%（51/888），無回答 1.0%（9/888）であった．

D. 考察

今回の調査の結果，初経を迎える時期は小学校 6 年が最も多く，初経時に女性性を意識したものは 64.1%であった．悩み事の相談相手としては，友人という回答が最も多く，次いで母親，母親以外の家族の順であった．月経に関する話をする相手は，母親という回答が最も多く，次いで友人，母親以外の家族の順であった．本調査では，友人の性別を問うていないため，相談相手として同性が選ばれる傾向があるかは明らかではないが，月経のような性に関することについては，同性の信頼できる存在がその話し相手・相談相手とされていることが本調査

の結果から読み取ることができる．悩み事の相談相手がいない，月経に関する話をする相手がいない者も1割程度みられた．特に月経に関する話をする相手がいない者は，14.0％（135/966）みられた．月経についての悩みやトラブルがないのであれば，話をする相手がいなくてもそれほど大きな問題ではないが，月経随伴症状や性感染症などのトラブルについては避難的に相談できる存在が重要であると考えられる．思春期後期の女子にとって性に関する相談を気軽にする事は困難であると考えられるが，性に関する相談については，母親，友人以外にも，校医や養護教諭，地域の助産師等が相談を受け付ける機会や場を設けることが重要であると考えられる．同時に，専門家であっても相談に至るまでの過程において，信頼関係の構築は不可欠であり，特に継続的な関わりが必要となるケースでは，一人で問題を抱え込まないよう日常的なレベルにおいても相談窓口の周知は重要であると考えられる．

E. 結論

本研究の結果，次のことが明らかとなった．調査の結果，以下のことが明らかとなった．1）初経を迎えた時期としては小学校 6 年が最も多かった．また初経時に女性性を意識した割合は 64.1%（619/966）であった．2）悩みの相談相手として「友人」71.7%が最も多くみられた．「相談していない」と回答した者は 8.9%であった．3）自己肯定感尺度の 4 つの下位領域得点は，自律 20.3，自信 11.4，信頼 16.9，過去受容 11.3 であった．4）5kg 以上の急激な体重減少を経験した者は 18.0%（160/888），自傷行為の経験は 8.6%（77/888）であった．

F. 研究発表

学会発表

西藤茜，生田貴恵，河内茉利，三谷由佳，山住千尋，増本綾子，野間裕子，小川知，倉本孝子，樋口善之，松浦賢長「月経に対する「慣れ」と認識に関連する心理・社会的因子」第47回大阪母性衛生学会（大阪），2009 年 1 月．

A　あなたご自身について、以下の設問についてお答えください。

A. あなた自身についてお尋ねします。
設問 A1～A6 について適当な回答を選び、当てはまる番号１つに○をつけてください。

A1. あなたは高校何年生ですか。
1. 1年生　2. 2年生　3. 3年生

A2. あなたはいつ初経をむかえましたか。
0. まだむかえていない　1. 小学校３年生以前　2. 小学校４年生
3. 小学校５年生　4. 小学校６年生　5. 中学校１年生
6. 中学校２年生　7. 中学校３年生　8. 高校生以降

A3. あなたは初経をむかえた時に性（女性であること）を意識しましたか。
1. はい→A４へ　2. いいえ→B1 以降へ

A4. あなたは女性として生まれてよかったと思いますか。
1. はい　2. いいえ

A5. あなたは月経がくることに慣れましたか。
1. はい→A6 へ　2. いいえ→B1 以降へ

A6. あなたはどれくらいの期間で月経に慣れましたか。
1. 1年未満　2. 1年　3. 2年　4. 3年　5. 4年　6. 5年以上

B. あなたの人間関係についてお尋ねします。
設問 B1～B8 について適当な回答を選び、当てはまる番号に○をつけてください。

B1. 悩みがあるとき、誰に相談していますか。（複数回答可）
1. 母親　2. 母親以外の家族　3. 友人　4. その他　5. 相談していない

B2. 月経について話しをする相手はいますか。（複数回答可）
1. 母親　2. 母親以外の家族　3. 友人　4. その他　5. 相談していない

〈友人について〉

B3. 友人と問題が生じた場合に、自分で解決できるほうですか。（○は１つ）
1. とてもそう思う　2. ある程度そう思う
3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

B4. 友人との人間関係をうまく築けていけるほうですか。（○は１つ）
1. とてもそう思う　2. ある程度そう思う
3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

〈家族について〉

B5. あなたは自分の家族が好きですか。
1. はい　2. いいえ

以下 B6～B8 の設問については母親がいる方を対象とします。
対象とならない方は C1 以降の設問にお答え下さい。

B6. あなたは自分の母親に似ていると言われるとうれしく思いますか。(○は１つ)

1. とてもそう思う　　2. ある程度そう思う
3. あまりそう思わない　　4. まったくそう思わない

B7. 母親との人間関係をうまく築けていけるほうですか。(○は１つ)

1. とてもそう思う　　2. ある程度そう思う
3. あまりそう思わない　　4. まったくそう思わない

B8. 母親と問題が生じたとき、自分で対応できるほうですか。(○は１つ)

1. とてもそう思う　　2. ある程度そう思う
3. あまりそう思わない　　4. まったくそう思わない

C. 身体像・自己肯定感についてお尋ねします。
設問 C1～C2 について適当な回答を選び、当てはまる番号１つに○をつけてください。
〈身体像について〉

C1. 他の女性の体型に注目して、それに比べると自分の体型は好ましくないと感じたことはありましたか。

1. よくある　　2. たまにある
3. ほとんどない　　4. まったくない

C2. 体型について泣くほど気にやんだことはありましたか。

1. よくある　　2. たまにある
3. ほとんどない　　4. まったくない

設問 C3～C22 のそれぞれについて、右側の選択肢 1～5 のどれかに○をつけてください。
〈自己肯定感について〉

	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
C3. 私は、自主的に行動するほうだ	1	2	3	4	5
C4. 私は、家族と一緒にいると落ち着く	1	2	3	4	5
C5. 私は、"自分にはできない"と決めつけることが嫌いだ	1	2	3	4	5
C6. 私は、自分なりの意見を持っている	1	2	3	4	5
C7. 私は、常に自分の意見が正しいと思う	1	2	3	4	5
C8. 私は、物事の結果を残念に思い続けるほうだ	1	2	3	4	5
C9. 私は、家族の中での役割を理解している	1	2	3	4	5
C10. 私は、自分の将来は自分ひとりで切り開くことができる	1	2	3	4	5
C11. 私は、過去の決断を後悔することがある	1	2	3	4	5
C12. 私は、家族との絆（きずな）を感じる	1	2	3	4	5
C13. 私は、一度決めた目標はなかなか変えない	1	2	3	4	5
C14. 私は、自分のことは自分ひとりで解決できるほうだ	1	2	3	4	5
C15. 私は、自分のとった行動を後悔しやすいほうだ	1	2	3	4	5
C16. 私は、どんな場所でも自分のやり方を通す	1	2	3	4	5
C17. 私は、むやみに人に頼るより、できるだけ自分で頑張る	1	2	3	4	5
C18. 私は、過去に"ああすればよかった"と思うことがよくある	1	2	3	4	5
C19. 私は、どんな環境にあっても自分のベストを尽くす	1	2	3	4	5
C20. 私は、どんな些細（ささい）なことでもよく落ち込む	1	2	3	4	5
C21. 私は、周囲から理解されている	1	2	3	4	5
C22. 私は、自分の親に似ていると言われるとうれしく思う	1	2	3	4	5

D. 今までのあなたの経験についてお尋ねします。
設問 D1～D3 について適当な回答を選び、当てはまる番号 1 つに○をつけてください。

D1. あなたはこれまでに、急激に体重が減った（5kg 以上）ことがありますか。

1. はい　　2. いいえ

D2. あなたは、これまでに虐待（言葉による暴力や精神的な暴力を含む）と思われるような対応を、親から受けたことがありますか。

1. まったくなかった　　2. ほとんどなかった
3. 時々、あった　　4. 日常的にあった

D3. あなたはこれまでに、自傷行為（リストカットなど）をしたことがありますか。

1. 考えたこともない　　2. しようと思ったことはある
3. 一度だけある　　4. 何度もある

「健やか親子21」思春期の保健対策の強化と健康教育の推進における指標「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」に関する研究
― 中学校における性教育による指標の変化 ―

樋口　善之　（福岡県立大学看護学部地域看護学講座）
伊藤　真弓　（釧路市立大楽毛中学校）
星　　光二　（釧路市立大楽毛中学校）
久保　清香　（釧路市こども保健部）
田丸　美和　（釧路市こども保健部）
小林　玲子　（釧路市こども保健部）
松浦　賢長　（福岡県立大学看護学部地域看護学講座）
山縣　然太朗（山梨大学医学部社会医学講座）

本研究は，中学2年生を対象とした性教育により，「健やか親子21」の思春期分野における指標の一つである「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」がどのように変化するかに着目した追跡研究をおこなった．調査対象は，中学2年生であり，追跡データの得られた95名を分析対象とした．調査の結果，以下のことが明らかとなった．1）指標に関する2項目「性行動は相手の心や体を傷つける可能性があると思うか」「自分の体を大切にしているか」について，性教育プログラムの前後で有意に改善しており，また，プログラム終了後4ヶ月後においてもその効果は持続していた．2）自己肯定感尺度の4つの下位領域得点のうち自律領域，過去受容領域得点は，調査した3時点間で変化していたが，それぞれの2時点間に有意差はみられなかった．

A. 研究目的

本研究は，中学校の2年生を対象とした性教育により，「健やか親子21」の思春期分野における指標の一つである「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」がどのように変化するかに着目し，「性行動は相手の心や体を傷つける可能性があると思うか」「自分の体を大切にしているか」の2つの項目を用いて追跡研究をおこなった．

B. 研究方法

北海道にある公立中学校の2年生を対象とした性教育プログラム開始時（平成20年4）とプログラム終了時（平成20年7月），プログラム終了後4ヶ月後（平成20年12月）の3時点において自記式質問紙調査を行った．授業プログラムの内容を資料1・2に示した．調査に用いた項目は3時点とも共通である（資料3）．ア）自己肯定感尺度（4下位尺度20項目），イ）「健やか親子21」思春期の保健対策の強化と健康教育の推進における指標「性行動による性

感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」に関する2項目「性行動は相手の心や体を傷つける可能性があると思うか」「自分の体を大切にしているか」

倫理面への配慮：調査によって得られた情報は研究目的以外の使用はしないことを文書にて説明し，同意の得られた者にのみ調査を実施した．なお，本調査は追跡研究デザインを採用したため，姓名および出生日から作成される個人 ID を利用した．個人 ID の生成方法は資料4に示した．

C. 研究結果

分析対象の性別の内訳は，男子 44 名（46.3%），女子 48 名（50.5%），無回答 3 名（3.2%）であった．

プログラム開始時調査（1回目）

ア）自己肯定感尺度（4下位尺度 20 項目）

それぞれの下位領域の得点の平均値は，自律領域 21.4（標準偏差 4.0），自信領域 11.9（標準偏差 2.5），信頼領域 16.5（標準偏差 3.8），過去受容領域 18.3（標準偏差 4.2）であった．本調査における自己肯定感尺度 20 項目のクロンバックのアルファ係数は 0.784 であった．各下位尺度得点間の相関係数は，自律－自信 0.457，自律－信頼 0.332，自律－過去受容 0.084，自信－信頼 0.189，自信－過去受容 0.133，信頼－過去受容-0.029 であった．

イ）「健やか親子 21」思春期の保健対策の強化と健康教育の推進における指標「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」に関する2項目

「性行動は相手の心や体を傷つける可能性があると思うか」という設問に対して，そう思う 31 名（32.6%），どちらかといえばそう思う 45 名（47.4%），どちらかといえばそう思わない 13 名（13.7%），そう思わない 4 名（4.2%），無回答 2 名（2.1%）であった．

「自分の体を大切にしているか」という設問に対して，そう思う 37 名（38.9%），どちらかといえばそう思う 39 名（41.1%），どちらかといえばそう思わない 10 名（10.5%），そう思わない 7 名（7.4%），無回答 2 名（2.1%）であった．

プログラム終了時調査（2回目）

ア）自己肯定感尺度（4下位尺度 20 項目）

それぞれの下位領域の得点の平均値は，自律領域 21.8（標準偏差 4.2），自信領域 12.3（標準偏差 2.8），信頼領域 16.8（標準偏差 3.5），過去受容領域 18.7（標準偏差 4.3）であった．本調査における自己肯定感尺度 20 項目のクロンバックのアルファ係数は 0.839 であった．各下位尺度得点間の相関係数は，自律－自信 0.489，自律－信頼 0.430，自律－過去受容 0.050，自信－信頼 0.264，自信－過去受容 0.122，信頼－過去受容 0.165 であった．

イ）「健やか親子 21」思春期の保健対策の強化と健康教育の推進における指標「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」に関する2項目

「性行動は相手の心や体を傷つける可能性があると思うか」という設問に対して，そう思う 52 名（54.7%），どちらかといえばそう思う 29 名（30.5%），どちらかといえばそう思わない 6 名（6.3%），そう思わない 3 名（3.2%），無回答 5 名（5.3%）であった．

「自分の体を大切にしているか」という設問に対して，そう思う 44 名（46.3%），どちらかといえばそう思う 38 名（40.0%），どちらか

といえばそう思わない5名（5.3%），そう思わない3名（3.2%），無回答5名（5.3%）であった．

プログラム終了3ヶ月後調査（3回目）

ア）自己肯定感尺度（4下位尺度20項目）

それぞれの下位領域の得点の平均値は，自律領域21.4（標準偏差4.0），自信領域11.9（標準偏差2.5），信頼領域16.5（標準偏差3.8），過去受容領域18.3（標準偏差4.2）であった．本調査における自己肯定感尺度20項目のクロンバックのアルファ係数は0.814であった．各下位尺度得点間の相関係数は，自律－自信0.511，自律－信頼0.310，自律－過去受容0.049，自信－信頼0.263，自信－過去受容0.094，信頼－過去受容0.075であった．

イ）「健やか親子21」思春期の保健対策の強化と健康教育の推進における指標「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」に関する2項目

「性行動は相手の心や体を傷つける可能性があると思うか」という設問に対して，そう思う37名（38.9%），どちらかといえばそう思う43名（45.3%），どちらかといえばそう思わない9名（9.5%），そう思わない1名（1.1%），無回答5名（5.3%）であった．

「自分の体を大切にしているか」という設問に対して，そう思う41名（43.2%），どちらかといえばそう思う41名（43.2%），どちらかといえばそう思わない71名（7.4%），そう思わない1名（1.1%），無回答5名（5.3%）であった．

時点比較

ア）自己肯定感尺度（4下位尺度20項目）

自律得点について，3つの調査時点間の比較をFriedman検定により行った．1回目から3回目までのデータを順序化し，その平均ランクを求めた結果，1回目1.94，2回目2.25，3回目1.80であった．平均ランクが高いほど，自己肯定感得点が高いことを意味する．3回の調査すべての回答した81名におけるFriedman検定の結果は有意であった（$\chi 2 = 9.810$，$df = 2$，$p = 0.007$）．Bonferroni法による多重比較を行ったが，有意差はみられなかった．

自信得点について同様の検定を行った．平均ランクはそれぞれ，1回目1.94，2回目2.04，3回目2.02であった．3回の調査すべての回答した80名におけるFriedman検定の結果は有意ではなかった（$\chi 2 = 0.485$，$df = 2$，$p = 0.785$）．

信頼得点について同様の検定を行った．平均ランクはそれぞれ，1回目1.90，2回目2.12，3回目1.98であった．3回の調査すべての回答した83名におけるFriedman検定の結果は有意ではなかった（$\chi 2 = 2.644$，$df = 2$，$p = 0.267$）．

過去受容得点について同様の検定を行った．平均ランクはそれぞれ，1回目1.98，2回目2.19，3回目1.83であった．3回の調査すべての回答した85名におけるFriedman検定の結果は有意であった（$\chi 2 = 6.915$，$df = 2$，$p = 0.032$）．Bonferroni法による多重比較を行ったが，有意差はみられなかった．

イ）「健やか親子21」思春期の保健対策の強化と健康教育の推進における指標「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」に関する2項目

「性行動は相手の心や体を傷つける可能性があると思うか」について，3時時点の比較をFriedman検定により行った．1回目から3

回目までのデータを順序化し，その平均ランクを求めた結果，1回目 2.25，2回目 1.74，3回目 2.01 であった．平均ランクが高いほど，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」に近い回答をする傾向があることを意味する． 3 回の調査すべての回答した 85 名における Friedman 検定の結果は有意であった（$\chi 2 = 23.296$，$df = 2$，$p < 0.001$）．Bonferroni 法による多重比較を行った結果，2回目・3回目>1回目（2回目－1回目，$z = -4.175$, $p < 0.001$），（3回目－1回目，$z = -2.494$, $p = 0.01$）という結果が得られた．

「自分の身体を大切にしているか」について，3時点間の比較を Friedman 検定により行った．1回目から3回目までのデータを順序化し，その平均ランクを求めた結果，1回目 2.18，2回目 1.89，3回目 1.92 であった．3回の調査すべての回答した 85 名における Friedman 検定の結果は有意であった（$\chi^2 = 11.271$, $df = 2$, $p = 0.004$）．Bonferroni 法による多重比較を行った結果，2回目・3回目>1回目（2回目－1回目，$z = -2.883$, $p = 0.004$），（3回目－1回目，$z = -2.665$, $p = 0.08$）という結果が得られた．

D. 考察

本研究では，「健やか親子 21」思春期の保健対策の強化と健康教育の推進における指標「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」に関する 2 項目「性行動は相手の心や体を傷つける可能性があると思うか」「自分の身体を大切にしているか」について，中学校における性教育プログラムの開始時，終了時，終了 4 ヶ月後の 3 時点を追跡調査し，その変化を調べた．その結果，2 項目ともプログラム開始時に比べ，プログラム終了時，プログラム終了 3 ヶ月後ともに「そう思う」「どちらかといえばそう思う」との回答が増加する傾向があることが示された．この結果は，性教育プログラムによって，これらの項目が指標が改善することを意味し，また，プログラムの終了時点から 3 ヶ月が経過した時点においても，プログラム開始時点との比較において，その改善傾向がみられたことは，性教育プログラムにより持続的な指標化以前が可能であることを意味している．本指標は，本来，高校生(15～18 歳)を想定した指標であるが，本研究においては調査対象を中学 2 年生に設定した．中学 2 年(13～14 歳)においては，2 次性徴の発現する時期であり，個人によっては活発な性行動がみられる時期でもある．性教育プログラムの実施において，改善指標を明確にすることは，プログラムの企画・立案およびその評価においても有効であると考えられる．本研究の成果は今後の思春期の保健対策の強化と健康教育の推進における重要な知見である．

E. 結論

調査の結果，以下のことが明らかとなった．1）指標に関する 2 項目「性行動は相手の心や体を傷つける可能性があると思うか」「自分の体を大切にしているか」について，性教育プログラムの前後で有意に改善しており，また，プログラム終了後 3 ヶ月後においてもその効果は持続していた． 2）自己肯定感尺度の 4 つの下位領域得点のうち自律領域，過去受容領域得点は，調査した 3 時点間で変化していたが，それぞれの 2 時点間に有意さはみられなかった．